様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０３２８１

研究課題名（和文）我が国における反抗挑戦症の実態と実証に基づく介入

研究課題名（英文）The reality of defiance challenge disorder in Japan and evidence-based interventions

研究代表者
佐藤　美幸（Sato, Miyuki）

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：３０６１０７６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、親の養育スタイルとODDの関連、ODDが疑われる幼児に対してPCITを実施し、PCITの効果と作用機序を明らかにすることを大きな目的とした。調査の結果、親の権威主義的養育スタイルが子どものODD傾向と関連していることが明らかとなった。親が子どもを一方的に強く叱る、脅すことが子どもの反抗的な行動と関連していると考えられる。10組の親子に対するPCIT介入の結果、親の養育スキルに改善が見られ、子どもの問題行動、ODD傾向が減少し、子どもの指示従事の割合が増加した。また、親の養育スタイルのうち権威主義的養育スタイルのみに有意な変化が見られ、得点が減少していることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
子どものODDや問題行動は親の権威主義的養育行動と関連していることが明らかとなり、親が子どもを一方的に強く叱る、脅すというやり方では子どもの問題行動が改善しない可能性を示唆している。また、親子にPCITを実施することで親の権威主義的な養育スタイルが減少し、子どもの問題行動やODD傾向が減少した。養育スタイルと子どもの問題行動の関連についてはこれまで研究が行われてきたが、本研究ではPCITによる介入によって実際に養育スタイルを変化させることができることを実証した。本研究の結果から、子育て支援の現場において親により効果的な養育スキルを伝え、習得してもらう実証に基づいた方法を提供することができる。

研究成果の概要（英文）：The major objective of this study was to determine the relationship between parental child-rearing style and ODD, the effects of PCIT on young children suspected of having ODD, and the mechanism of action of PCIT. The results of the study revealed that parents' authoritarian child-rearing style was associated with children's ODD tendency. Parents' strong unilateral scolding and threats to their children were associated with children's defiant behavior; PCIT intervention for 10 pairs of parents and children resulted in improvements in parenting skills, a decrease in children's problem behaviors and ODD tendencies, and an increase in children's rate of instructional compliance. In addition, significant changes were found only in authoritarian nurturing style among parental nurturing styles, with scores decreasing.

研究分野：心理学、特別支援教育

キーワード：PCIT　ODD　養育スタイル　保護者支援　問題行動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

反抗挑戦症（Oppositional Defiant Disorder，以下 ODD）は，かんしゃくや挑発的な行動といった特徴が６か月以上持続する状態であり，米国における ODD の有病率はおよそ 3.3%と出現率は決して低くない（American Psychiatric Association, 2013）。子どもの問題行動は母親や保育者の育児負担感と関連することが指摘されており（平田，2011），ODD の子どもへどのように対応すべきかという知見は非常にニーズが高いと考えられる。また，原田（2013）は ODD の子どもの予後は楽観できるものではなく, ODD がさらに進展した状態である素行症（Conduct Disorder）になる前，10 歳前後までに治療的介入を開始することが望ましいと指摘している。ところが，日本では，ODD についての研究がほとんど行われておらず，出現率，発生機序，効果的な介入について検討されていなかった。

米国では，幼児期の ODD に対する介入方法の 1 つとして親子相互交流療法（Parent-child Interaction Therapy：以下，PCIT）の効果が示されている。アメリカ心理学会の臨床児童青年心理学部会は ODD の子どもに対するさまざまな介入の効果を検討し，PCIT を十分に確立された（Well-established）方法と評価している（Kaminski & Claussen, 2017）。PCIT は親と子どもに 1 対 1 で遊んでもらい，セラピストが観察室からマジックミラー越しに観察し，親が親子相互交流のためのスキルを獲得できるようにトランシーバー等を用いてライブコーチングを行うという方法である。プログラムの前半は親子の関係を強化することを目的とした Child Directed Interaction（CDI）で, PRIDE スキルをライブコーチングする。後半の Parent Directed Interaction（PDI）では，獲得した PRIDE スキルを維持しながら，良い指示の出し方，一貫した対応をするためのタイムアウトのスキルについてライブコーチングする。親は実際に子どもと遊びながら適切なスキルを練習し，即座にセラピストからフィードバックを得ることができる。日本では PCIT が導入されたばかりであり，その効果が十分に検討されるには至っていない。

PCIT はスキナーの行動理論とバウムリンドの養育スタイルを理論的背景としている。スキナーの行動理論では強化，消去といった方法を用いて行動を修正する。PCIT では，これらの手法は親が獲得するべきスキル（PRIDE スキルやタイムアウト）に含まれている。また，バウムリンドの養育スタイルでは，反応性が低く要求性が高い独裁的（権威主義的）養育，反応性が高く要求性が低い許容的（放任的）養育，反応性も要求性も適度に高い権威的（指導的）養育の３つの養育スタイルに分類されている（Baumrind, 1995）。PCIT では CDI において反応性が高く温かみがある対応を獲得し，PDI において寛容すぎない要求性の高い対応を獲得して権威ある養育スタイルを目指す。しかしこれまでの研究では，ODD の子どもに対する PCIT の効果が行動理論によるものなのか養育スタイルによるものなのか作用機序が明らかになっていなかった。

２．研究の目的

そこで本研究では，大きく２点について検討を行うことを目的とした。1 点目は２歳から５歳 11 ヶ月の子どもを養育する親に調査を行い，親の養育スタイルと ODD の関連を明らかにした（研究成果１）。２点目は，ODD が疑われる幼児に対して PCIT を実施し，PCIT の効果と作用機序について考察した（研究成果２）。

３．研究の方法

＜研究１の方法＞

２歳から５歳 11 ヶ月の子どもを養育する親 400 名にオンラインアンケート調査を実施した。アンケートでは親が養育する子どもについて，(1) 反抗挑戦性評価尺度（ODBI）(2)アイバーグ子どもの行動評価票（ECBI），(3)日本語版養育スタイル尺度（日本語版 PSDQ）への回答を依頼した。アンケートの実施にあたっては，京都教育大学研究倫理委員会の審査(受付番号 2308)で承認を受け，研究の目的，個人情報は取得しないこと，アンケートで得たデータを研究で発表することを文書で説明し，同意が得られた場合のみ回答を求めた。

回答者の内訳：回答者である親の性別は男性 134 名，女性 266 名であり，平均年齢は 38.5 歳であった。回答者が養育する子どもについては男児が 204 名，女児が 196 名であり，調査時点で２歳 100 名，３歳 100 名，４歳 100 名，５歳 100 名であった。

＜研究２の方法＞

２歳から５歳 11 ヶ月の子どもと親を対象とした PCIT を実施し，その効果をシングルアーム試験で検討した。当初本研究は対面で統制群を設定して実施する予定であったが，新型コロナウイルスの蔓延に伴い対面実施からオンライン実施に切り替えた。オンライン実施への移行に伴い，システムの構築やスタッフのトレーニングにエフォートを割いたことから実験デザインを変更することとなった。研究の実施にあたっては，京都教育大学研究倫理委員会の審査(受付番号 2202)で承認を受け，研究の目的，取得した個人情報の取り扱い，自由意志による参加，アンケートで得たデータを研究で発表することを文書で説明し，同意が得られた場合のみ対象者に研究への参加を依頼した。

(1)対象者：対象は子育てに困難を感じる親とその子ども 10 組であった。親の平均年齢は 40.5 歳，男性２名，女性８名であった。子どもの ODDI の得点は 19 点から 39 点であり，１名を除きカットオフ値の 20 点を上回っていた（ただし，本尺度は６歳以上の子どもの標準データに基づいてカットオフ値が設定されているため参考値となる）。親子はネット検索や紹介を通して本研究への参加を申し出た。なお包含基準は子どもの発話が３語文以上または言語理解が２歳以上であり，除外基準は子どもの発話が２語文以下または言語理解が２歳未満であった。参加を希望した全員が介入前の時点で包含基準を満たしていた。対象となった子どものうち４名が開始前に ASD の診断を，１名が実施中に ADHD の診断を受けていた。

(2)セラピスト：セラピスト（n=6，100%女性）は，PCIT 認定セラピスト 3 名および PCIT 認定に向けて実践を行うセラピスト 3 名であった。すべてのセラピストが PCIT international が認定する所定の研修を受講し，介入を実施するのに必要な要件を満たしていた。

(3)測度：3 つの質問紙と 1 つの行動観察システムを使用した。質問紙は以下の通りである。①反抗挑戦性評価尺度(ODBI)，②アイバーグ子どもの行動評価票（ECBI），③日本語版養育スタイル尺度(日本語版 PSDQ)。行動観察は④Japanese version of Dyadic Parent-Child Interaction Coding System fourth edition (DPICS-IV)(Eyberg et al., 2014 加茂訳 2014)を行った。本行動観察は，子どもが遊びを選ぶ子ども指向相互交流（Child-led play: CLP 場面），親が遊びを選ぶ親指向相互交流（Parent-led play: PLP 場面），子どもが一人で片付けを行うお片付け（Clean-up:CU 場面）の 3 場面における親子の相互交流を評定する指標である。親の行動を，具体的賞賛，繰り返し，行動の説明，中立的会話，一般的賞賛，直接的命令，間接的命令，質問，否定的会話に分類し，CLP 場面におけるその頻度を測定した。本研究では具体的賞賛，繰り返し，行動の説明を Do スキル，命令（直接的，間接的），質問，批判を Don’t スキルとしてまとめた。また子どもの行動については PLP 場面および CU 場面における従事行動の頻度を測定した。以上の測度を実施前後および３か月後フォローアップにて実施した。また，①と④については介入を行う毎セッションで実施した。

(4)介入内容：本研究は親子相互交流療法 Parent-Child Interaction Therapy プロトコル 2011(Eyberg & Funderburk，2011 加茂訳 2011；以下，PCIT プロトコル 2011)に従い実施した。また，ウェブ会議システムを使用し，セラピストは自宅にいる対象者とオンラインでやり取りを行なった。

PCIT では親子の関係をより暖かいものとすることを目的とした子ども指向相互交流（Child-Directed Interaction: CDI）と，子どもの破壊的行動や指示に対する不従事を改善することを目指した親指向相互交流（Parent-Directed Interaction: PDI）の２段階から構成されている(McNeil & Hembree-Kigin，2011)。

CDI:最初の段階の Child-Directed Interaction(CDI)において，親は子どもに対して Do スキル(行動の説明，繰り返し，具体的賞賛，真似，楽しむ)を使用する回数を増やし，Don’t スキル(質問，命令，否定的会話)を減らすことが求められる。不適切な行動が生じた場合は，無視か遊びの中止を適用する(McNeil & Hembree-Kigin，2010)。CDI の段階で求められるスキルの総称として CDI スキルと呼んでいる。

親がこれらの対応を取ることができるようになるために，講義形式でこれから練習するスキルについて説明するティーチセッションを１回オンラインで１時間実施した。次に親が子どもに対してスキルを使用しその場でセラピストからフィードバックを受けるコーチングセッションを行なった。コーチングセッションは週に１回１時間のペースで実施し，対象者の自宅で子どもと親が遊んでいる様子を映してもらい，セラピストはその様子を見ながらイヤホンを通して親にフィードバックを行い，Do スキルを増やし，Don’t スキルを減らすこと，子どもがいうことを聞かない場面での無視の方法や遊びの中止の方法をその場でコーチングした。コーチングセッションは回数が定められておらず，毎回のセッション冒頭に行われるアセスメント(DPICS-IV; Eyberg et al., 2014 加茂訳 2014)において CDI の修了基準（５分間の CDI 場面において具体的賞賛，繰り返し，行動の説明をそれぞれ 10 回）を満たすまで繰り返し行った。

PDI:Parent-Directed Interaction (PDI)においては， CDI スキルと PDI スキル（直接的命令と一貫した対応）の両方を必要に応じて使用することが求められる。具体的には，基本的に CDI スキルを使用して暖かい雰囲気で子どもと遊び，必要に応じてお片付けなど直接的命令を出し，命令を出した後は，決められた手続きに則って一貫した対応をする。PDI においても親はティーチセッションを１回受講し，その後コーチングセッションを修了基準を満たすまで参加することが求められる。なお PDI の第２回コーチングセッション以降においては，実際の生活の場での命令をコーチング中に練習することが可能になる(Eyberg & Funderburk，2011 加茂訳 2011)。実際の生活の場での命令とは，家庭内において実際に実際に行うであろう命令のことであり，必要に応じて玩具以外のもの（例：食器や着替え）を持ち込んで実施する。また親の要望に応じて，オプションのプロトコル（例：ハウスルール 5，公共の場での PCIT,兄弟セッション）を実施する。公共の場での PCIT においては事前に親とセラピストが相談し計画を立てて実施する(Eyberg & Funderburk，2011 加茂訳 2011)。セッション中においては，親は主に CDI スキルを使用しつつ，必要に応じて PDI スキルを使用することが求められる。セラピストは親と一緒に外出し，その場でコーチングを行う。兄弟セッションとは PCIT に適合する兄弟児がいる場合に実施するセッションである。セッション中，親は子どもと兄弟児に交互にスキルを使用しつつ，子どもたちの協力的または向社会的な関わりに注目することが求められる(Eyberg & Funderburk，2011 加

茂訳 2011)。CDI と同様セッション数は定められておらず，修了基準を満たしたら終結となる。

４．研究成果

＜研究１の成果＞

本報告書では親の養育スタイルが ODD の傾向に与える影響を検討した成果を示す。日本語版養育スタイル尺度の下位尺度(指導的な親，権威主義的な親，放任的な親)を説明変数，反抗挑戦性評価尺度（ODBI）の得点を目的変数とする階層的重回帰分析を行った。第１ステップで統制変数として子どもの年齢と性別，第２ステップで親の養育スタイル(指導的な親，権威主義的な親，放任的な親)を第３ステップで子どもの性別と親の養育スタイルの交互作用項を投入した（強制投入法）。分析の結果第２ステップで決定係数の増分が有意（ΔR^2=0.141，p<.01）となった（Table1）。養育スタイルのうち「権威主義的な親」の主効果が有意であった（β=0.39，p<.01）。

Table1 子どもの ODD 傾向に対する階層的重回帰分析の結果

		ステップ１		ステップ２		ステップ３	
		β	有意確率	β	有意確率	β	有意確率
属性	子どもの年齢	1	0.04*	0.29	0.54	0.27	0.56
	子どもの性別	-0.69	0.53	-0.26	0.8	-8.39	0.22
養育スタイル	指導的な親			0.02	0.47	-0.05	0.64
	権威主義的な親			0.39	0.00***	0.29	0.13
	放任的な親			0.02	0.91	-0.14	0.76
子どもの性別と養育スタイル	子どもの性別×指導的な親					0.04	0.49
	子どもの性別×権威主義的な親					0.07	0.56
	子どもの性別×放任的な親					0.1	0.73
	R2	0.006		0.141		0.14	
	ΔR2			0.141***		0.003	

*p<.10，**p<.05，***p<.01

以上の結果から，ODD 傾向に影響する変数としてはまず年齢があり，６歳未満の子どもに関しては年齢が上がるほど ODD の得点も増加することが示された。一方性別による差は見られなかった。養育スタイルの影響については，権威主義的な親である場合に ODD の傾向が強くなることが明らかになった。

＜研究２の成果＞

PCIT が子どもの行動にもたらす変化を検討するため，ECBI についてフリードマン検定を行った。ECBI は子どもの問題行動を示す強度スコア，親が子どもの問題行動をどの程度問題だと感じているかを示す問題数スコアに分かれている。分析の結果，ECBI の強度および問題数スコアにおいて有意な減少が見られた（強度スコアの η^2 = .65，p < .001，問題数スコアの η^2 = .54，p < .01)。これらの指標に多重比較を行った結果，ECBI の強度スコアにおいては実施前と比較して実施後と３か月後に有意に減少していることが示された。それに加えて実施後から３か月後にかけて有意な増加傾向が示された（Figure 1)。ECBI の問題数スコアについては，実施前と比較して実施後，３か月後に有意な減少が示された（Figure 2)。

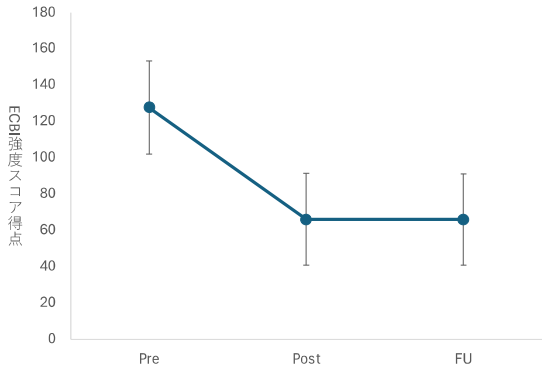

Figure 1 ECBI 強度スコアの変化

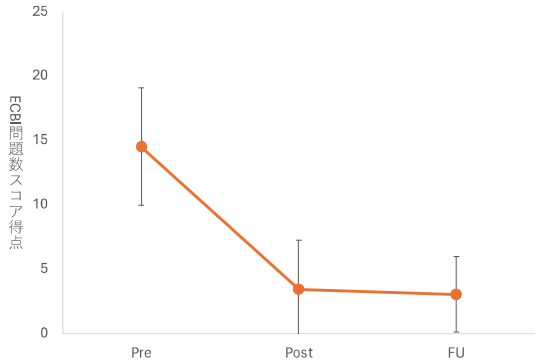

Figure 2 ECBI 問題数スコアの変化

PCIT が親の子どもに対する行動にもたらす変化を検討するために，行動観察の Do スキルと Don’t スキルについてフリードマン検定を行った。その結果いずれのスキルにおいても有意差が見られた(Do スキルの η^2 = .58，p < .01；Don’t スキルの η^2 = .36，p < .05)。多重比較の結果，Do スキルについては実施前と比べて介入後と３か月後に有意に増加していた（Figure3)。Don’t スキルについては実施前と比べて介入後と３か月後に有意な減少が示された（Figure4)。

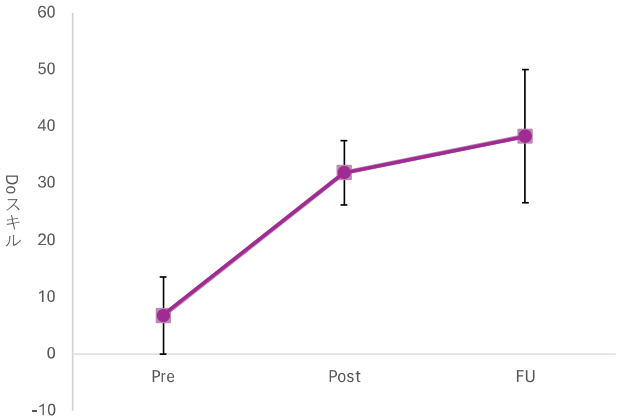

Figure3 Do スキルの変化

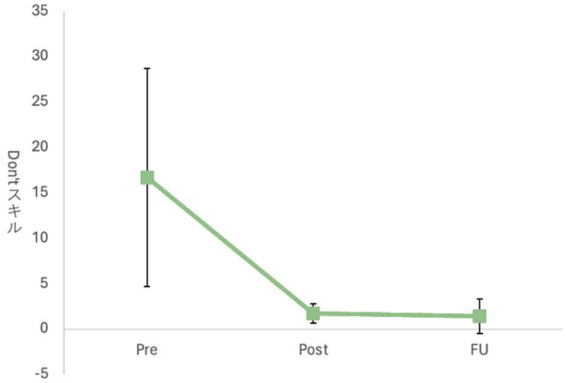

Figure4 Don ’ t スキルの変化

PCIT が子どもの従事行動に与える効果を検討するために，PLP 場面および CU 場面における子どもの従事行動の割合に対しフリードマン検定を行ったところ，有意差が示された($\eta 2$ = .37, p < .05)。多重比較を行った結果，実施前に比べて実施後および 3 か月後に有意な増加が見られた（Figure5）。次に PCIT が親の養育スタイルにもたらす影響を検討した。養育スタイル尺度については，フォローアップ期のデータに欠損が多く見られたことから，介入前後の比較を行うこととした。ウィルコクソンの符号順位検定を行った結果，介入前後の権威主義的な親得点において有意差が見られ，介入後に有意に得点が減少（V=45，p<.01）していることが明らかとなった（Figure6）。指導的な親，放任的な親については有意差が見られなかった。

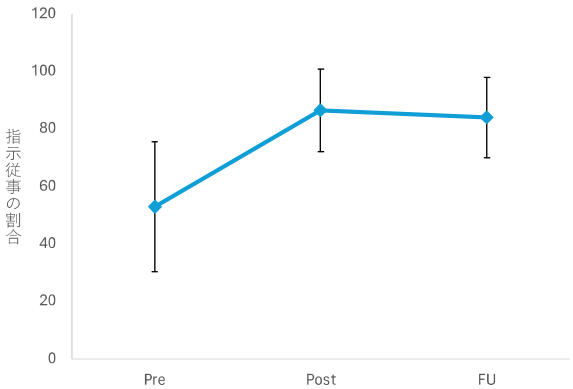

Figure5 指示従事割合の変化

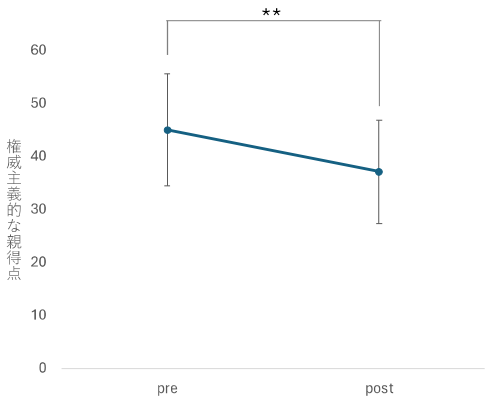

Figure6 養育スタイル尺度得点の変化

最後に PCIT が ODD 傾向に及ぼす影響を検討した。ODBI 尺度についてもフォローアップ期のデータに欠損が多く見られたことから，介入前後の比較を行うこととした。ウィルコクソンの符号順位検定を行った結果，介入前後の ODBI 得点に有意差が見られ，介入後に有意に得点が減少（V=51，p<.01）していることが明らかとなった（Figure7）。指導的な親，放任的な親については有意差が見られなかった。

以上の結果から，親の権威主義的養育スタイルが子どもの ODD 傾向と関連していることが明らかとなった。親が一方的に強く叱ることと子どもの問題行動が関連していると考えられる。また，PCIT による介入によって，親の権威主義的養育スタイルを減らし，子どもの問題行動や ODD の傾向を低減することができることが示された。

今後は本研究の成果をより頑健なエビデンスとするために，ケース数を増やし統制された実験デザインで検討を行っていく必要がある。

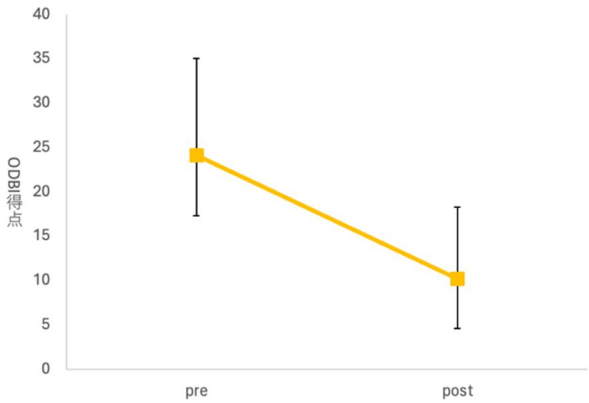

Figure7 ODBI 得点の変化

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 金山裕望，佐藤美幸，佐藤寛	４．巻 －
２．論文標題 父子家庭親子への遠隔親子相互交流療法に関する症例研究	５．発行年 2024年
３．雑誌名 認知行動療法研究	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 佐藤美幸
２．発表標題 発達障害児支援の最前線―医療・学校・家庭での支援　「親子相互交流療法（PCIT）」
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第46回大会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 佐藤美幸
２．発表標題 大学相談機関におけるPCITの実践
３．学会等名 第９回PCIT-Japan & CARE-Japan合同研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 金山裕望，中野麗羽，金平菜七子，佐藤寛，佐藤美幸
２．発表標題 親子相互交流療法における養育者と子どもの対人相互作用―自閉スペクトラム症のある子を持つ親子と定型発達の子を持つ親子の比較―
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第45回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 金山裕望，金平菜七子，中野麗羽，佐藤寛，佐藤美幸
２．発表標題 Parent-Child Interaction Therapyにおけるセラピストと養育者の対人相互作用の機能的関係の検討
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第45回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Sato, M., Furukawa, K. & Kamo, T.
２．発表標題 Validity and Reliability of the Japanese Version of the Sutter-Eyberg Student Behavior Inventory-Revised (SESBI-R): A Preliminary Results.
３．学会等名 2019 PCIT International Convention（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kaneyama, Y. Sato, H. & Sato, M.
２．発表標題 Coaching in Parent-Child Interaction Therapy: Sequential Analysis of Interaction between a Mother of Child with Autism Spectrum Disorder and a Therapist in Child-Directed Interaction Coaching
３．学会等名 9th World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kaneyama, Y., Kanehira, N., Sato, H. & Sato, M.
２．発表標題 Therapist-Mother Interaction Patterns in Families who Have Children with Autism Spectrum Disorder or Typical Development in the Course of Parent-Child Interaction Therapy
３．学会等名 50th European Association of Behavior and Cognitive Therapies Congress（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 金山裕望、今倉樹、中井杏花利、佐藤美幸、佐藤寛
２．発表標題 親子相互交流療法が育児幸福感に与える効果の予備的検討：１事例における継時的な変化
３．学会等名 日本認知・行動療法学会 第47回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 金山裕望，佐藤美幸
２．発表標題 父子家庭親子へのIPCIT
３．学会等名 日本認知・行動療法学会 第48回大会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	古川　心 (Furukawa Kokoro) (90760661)	神戸親和女子大学・発達教育学部・講師 (34514)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関